白黒の龍の日記

ヘッドホン侍s

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白黒の龍の日記

【Ｎコード】
Ｎ９１１７Ｔ

【作者名】
ヘッドホン侍ｓ

【あらすじ】
生まれたばかりの竜を育てる苗床となるのが、なぜかしら定めとなってしまっているヘイロンの一族。そして、また『贄』のときがやってきた。
贄として森に捧げられた人は、一度も帰ってこない。
果たして、ヘイロンはどうなってしまうのか！？

森の住人たちの日常と龍の成長日記。

1. 教育者は苗床

1. 教育者は苗床

さぁ、時が満ちた。
そして、泉で龍は生まれる。
愚かな君へせめて、これをあげよう。

このどこまでも白き龍を。

「お前が今回の“教育者”だ」
村長に呼ばれて、何かとドキドキしていた。それが。
「――はぁっ？」
やっぱり、俺も“教育者”か。しかし、
「なんで毎回、俺ら一族がっ…」
「わかるだろう。考えてみることだ。そして、何より主様がそうおっしゃった」
村長は、さぞかし当たり前のようにそう言い放って、自分から呼び出しておいて去っていってしまった。

分からない。俺がそこまでの大罪を犯したか？何が、いけなかっ

たか。勿論、悪いコトと言われて、思い当たる節がないほど俺は善人じゃない。
しかし自分でいうのも何だが、学業だって、普段の生活態度だって、申し分ないと思う。
何が、“教育者”になって罰を受けるほどの罪だったか分からない。

†††††††††††

――ずっと昔のあるとき、ある村には、龍がいた。生まれたばかりの何も知らないそれの苗床となるものを罪人を“教育者”と呼んだ。
教育者たちは龍を必死になって育てる。
それが罪人の運命、いや、宿命なのだ。…

†††††††††††

村長室をでるやいなや、俺は後ろから何か固いもので殴られたようだ。
「ほら、あの黒いのだ」
あぁ…。
ただ一つ、罪として思い浮かぶのは…この髪くらいかな――――…

少年は気を失った。
「いつ見ても不気味だな」
男らが少年に麻布を被せて縄で巻いた。気を失って力なくダラリと垂れた腕は男らと何ら変わりないのに。
「さぁ、いそげ。そろそろ刻限がくるぞ」
「分かっているさ」

そのまま男らは連なって村を出て行った。少年の入った麻袋も剥き出しに。そんな光景なのに、村人は振り向きも咎めもしない。でも、だからと言って、村人を怒ってはいけない。
当たり前なのだから。これが村人の普通なのだ。
だから、憐れむことをしても怒ってはいけない。だが、しかし怒ったところで彼らにその怒りを理解することは到底できないだろう。

どさっ

少年の身体が乱雑に投げられた。村から森の奥へ奥へ進んでいった男らは、森がちょっと開けた岩場でたち止まり、そうしたのだった。

鈍い音を立てて岩場に落ちた少年の身体は力無くダラリとして、岩に溶けてしまいそうだった。

2．俺はなんなんだ

2．俺はなんなんだ

サアァ――――…

水のこすれる音が聞こえる。…滝の音か。

俺はむくりと起き上がって、辺りを見回した。

森。

滝。

…岩。

足元に広がる岩場に気がついて、この身体がズキズキ痛んでいるわけが分かった。あの野郎ども…。主に差し出すにしてももうちょっと丁寧に扱ってくれたっていいだろ。

つか捧げ物なら、大切に扱うだろ！

自分で言っていて悲しくなってきた。

教育者、か。

所謂、生け贄としか言いようがないだろうが…。

まだズキズキと痛む頭をさすりながら、視線を上に移したときだ。

白いもやが、辺りを占領しはじめた。

霧かと思ったが、そうでもないみたいだった。

そう、これは水そのもの。

肌に触れる空気がひんやりと水に変化していって、気付いたときには、もう俺は完全に水の中にいた。

口に触れているのは、確かに水で、肺もひんやりと浸っているの

が分かるというのに、苦しくなかった。
むしろ清々しい心地よさがあった。
それが俺を余計に失望させた。

生け贄として主に喰われたのだと思った。
死んでしまったのだと思った。
だからこんなにほっとしているのだと思った。

違った。

俺は、確かに生きている。
心臓の脈が次第に強く感じられて、身体はこんなにも温かい。
これなのにどうして死ねただなんて思ったことだろうと自分で嘲ると、水はいつの間にか消えていて、また岩の、元の風景に戻ってしまっていた。

さっきまであんなに水だと思っていた肺の中も、ただの冷たい空気だった。
元の、普通の世界だった。

ただ一つ。

滝から続く河原に少女が横たわっていたことを除いては。

と、ととりあえず、あんな河原に少女が転がっている今の状況は理解できないが…。
少女が、危険だということだけは理解できた。あんな滝打つところにいて、巻き込まれでもしたら大変だと少女の近くまで走っていって、はたと気がついた。

あんなところに、いきなりこんな小さな少女が一人で現れるだろうか。
いや、否。
少女が人間じゃない。だから、滝に水に恐怖心がないのだ。

しかし、少女と目が合ってしまって、少女があまりに無邪気に笑いかけるので、俺もついついニヘラと笑みを零してしまった。

主にしてやられた。
とか思いつつ。でも、その十何年ぶりの純粋な笑顔は俺に充分すぎる攻撃力があった。
くっそ…。

「んなとこいると危ねぇぞ」
俺は自ら主の罠にハマりにいくんだ！
強い決心を胸に、少女に手を差し出した。

「んあ？」
少女が俺の手を握った。俺はとっさにギュッと目を瞑る。
…。
…へ？
何も起こらない…？

「だあ」少女は相変わらず無邪気な笑みを浮かべている。
…拍子抜けする！
な、なんなんだ…。
普通、ここはトラップだろうよ！
全く、村を守る神の主とか言わせといて、龍の生け贄とかほざいてる時点で相当ズレた奴だとは思っていたが…ここまでだったか…。

「何もしないなら離してくれよ！少女！」
「うぁ？」
少女が俺から離れない。つーか、握った手を離さない。
とりあえず言葉は通じないらしく、俺が何を言っても、キャハキャハと笑ってはしゃぐだけだ。

「…あのなぁ……」

いないいないばぁじゃねーんだぞ！…いや、もしかして、俺の顔がおかしいと皮肉って笑っているのか？

「だあっ」
不信の目を向けてみるものの相変わらず少女は無邪気に笑うだけだ。
…それはないかな。

まぁ、最も、そう思わせることが主の狙いなのかもしれないが。だって、主は俺を使って、龍を育てるのだ。要するに苗床だろ。つ

まり…
こうやって気を許さしておいて、慣れて、俺が心を許して、少女が可愛くなってきた頃にいきなりっ……。
ダメだ。止めておこう。考えないようにしておこう…恐ろしい。
しかし、水をかけてやるとキャッキャッやってる様子からして、本当コイツは赤ちゃんみたいだ。
いや、みたい――――ではないのかもしれない。
そ…そうか。俺が苗床になるというのは、も…もしかして…。
俺、をマジで教育者に、つ、つまり母親にするってか――――!?
いやいやいや。
まっさかぁ。
自分でだした仮定に馬鹿らしくなってきた。ここまで生に執着があったとは意外だ。
この髪色のせいで、この世には絶望したと思ってい…
「んにゃふぉっ！」
少女がそこらの石をめくって出てきたカニに指を挟まれた。
…いや…でも、なぁ…？
「っにやってんだアホ。ほら、てめぇ龍だろ、自分んちくらいあるだろうよ」
まぁ、意味は理解してないだろうが、俺は一応そうは言っておいた。
「ぅ？」
少女はやはり不思議そうな顔だったが、俺は紳士であるからその指からそっとカニを取ってやった。

適当に歩いてれば、主がまたさっきみたいに導いてくれるだろう。
…多分。俺のあの馬鹿げた仮定が正しいならば。
育てるんならな、養育費はともかく、家くらいは出してくれるだろう。例え、主がズレた奴でも、そのくらいの常識は心得ていて欲しい。

…俺が１０歩ほど歩き出した頃だった。
「んぎゃぁぁあああ！！！！！！」
少女が赤ん坊の如く雄叫びを上げ始めた。
すがるような目つきで、破壊兵器を俺に飛ばしてくる。
うげ。
ま、まさかの母決定ですか、俺。
「分ーかったからぁ」
破壊兵器なみの攻撃力をもった声をどうにか治めようと、俺は少女のもとへ走っていった。
俺が少女のもとになんとか辿り着いて、少女に今度はズボンを握られるまでには少女はすっかり笑顔に戻っていた。
「んむー」
いや、あのさ。そんなに俺と離れたくないならついてこようよ？
自己中な娘だ。
…俺が本当に母親になるんなら、そこんとこもみっちり教えてやらんとな。

3．俺はやはりママらしい。

3．俺はやはりママらしい。

風は唄っている。ほら耳をすませば。

風は唄っている。ただ淋しい唄を。

黒い服の集まる所から。

笑うように、泣くように、ささやくように。

《トナリノバアヤガシンダ　，トナリノバアヤガシンダ》

風は唄っている。ほら…

ピシャリと窓は閉まった。風は唄えなくなった。

かなしいうたを。

けれど唄えなくなるそのときに、

風は確かに笑った。

《ケレド　，イツカワスレテシマウノデショウ》

僕は、とりあえず森に住んでいる。あ、知らないだろうから、教えといてあげようか。僕は、風の妖精。――おどろいた、ねぇ、そうでしょう。

「うん、うん。そうかい、ふーん…」僕を、独り言の多い不審者だと思わないで欲しい。それは、あまりに愚かだから。
よく耳をすましてごらん。目を凝らしてごらんよ。
風たちはおしゃべりなのさ。可愛いのから、キレイなのから、乱暴なのまで、色々あるけれど、とりあえず唄が好きな陽気な奴ら。
――って言っても　君たち人間には見えないだろうね。
見えないと思ってる奴らがどんなに見ようとしたってムダだから。やになる。
誤解しないで欲しい。僕は人間が嫌いなワケじゃないよ。
ただ思うのさ。愚かだなって。

＞i32933―4157＜

「ねえねえー！！これなーに？」
大声で少女が叫んでいる。その手には、握り潰されそうな…
「そりゃトカゲだ」
「これくえるか？」少女は嬉しそうに目を輝かせた。
うげ。食…えない…ことも…ないと…思うが…。出会った頃と少しも変わらず愛らしい姿の少女がトカゲを喰う姿を一瞬、想像しかけた。
いや、ないな。
「喰えん。可哀想だろ。なんでも食おうとするんじゃない」

一応、もう少し咎めておく。
「俺らが生きていくのに、仕方なく命を頂いてるんだ。お前だって意味もなく殺されたくないだろ？」
これも母親の勤めだろう。もう最近、もしこの子がトラップでも食われてしまってもいいと思っている自分がいる。自暴自棄とかではない。…目に入れても痛くない状態。所謂、親バカ状態である。
かく言う俺は、いまいち母親に教育された記憶がないが、この子には何かを学ぶべき社会がないのだから、母である俺が教えてやらなきゃならない。たとえ、口うるさい親だとウザがられても。
この子のためを思って、だ。
まぁ、今のところ、俺の才能からか、少女は奇跡的に純粋に育ってくれていて、俺を慕ってくれているから、まだその心配はいらなそうだ。
それよりも…。
「ん？どうした？」
少女は、手に握ったトカゲを見つめて難しそうな顔をしている。少女の成長は異様に早い。まぁ、そのこと自体には驚きはしない。龍のこの子ならなんでもありだろう。でも時々、その思慮深さに驚かされる。
そうか、そんな発想もあるか――…と。
また何か考えているのだろう。
「カワイソってなに？」
…。
正直こけそうになった。コイツの期待の裏切り方にも驚くな。
なんかの生物名かと思ったのだろう。カワイソトカゲ…？だとか呟いている。頭の良い無知に概念を教えるというのは難しい。おかげで俺はここ1年、辞書が手放せない。
「これはーなにー？」
カバンをあさっているうちに、また次の質問を浴びせられた。
やれやれ。次は何の生物を捕まえたの……か……。

視線を手元から上へ移すと、少女が捕まえていたのは、お兄さんだった。

「やあ、風の噂にきいたよ。君が今回の贄だって？」
やけに煌びやかなお兄さんが微笑んだ。
風の噂…？
「まさか」
俺は言った。そうだ、この子と出会ってから俺は誰とも接触していないし、村では俺のことを話すのはもう禁忌だろうからな。
こいつには見覚えにはないから、村人ではないはずだ。
それなのに、このことを知っているだなんて…
「お前、何者だ」
俺は再び青年を睨みつけた。
怪しすぎる。なんで外部者がこのことを知っている。
つーか、そう思って考えりゃ、余計怪しい。うん。
大体、こんな森の奥に綺麗な金髪の美青年がいること自体、怪しすぎる。

もはや恐ろしくなってきて、少女を青年から引き剥がし俺の後ろに隠した。

「そんなに警戒しなくてもいいじゃない。風たちの噂に聞いたのさ」
風たち…？
さて、そこを強調したと言ったということは…
「僕は風の妖精だよ」
きたーー！！
いずれ来ると思っていたが、やっぱこういうのきたー！！！！！

「か…ぜの声、聞こえるんですか」
答えるべき、言葉が見つからなくて適当に答えた。
「きこえないの？」
逆にそれが災いした。
「龍の親なのに？」
風の妖精は俺をさぞかし憐れんだような目でみて仕舞いには「かわいそうに…」とか呟きやがった。
そして更に始末が悪い。少女まで同じ視線を向けるようになった。
そんな純粋な目で…俺を憐れまないでくれ！！
「俺は哀れな人間じゃねーよ！！まだっ…」
くっ…これは苦しい言い訳にしか聞こえないだろうが……
俺はギュッと拳を握った。いつの間にかかいた汗で湿っている。
「まだやり方を知らないだけだっ！！！！」

空を仰いだ。きこえないはずの山彦が森に響く気がする。
…空しい。
これじゃホントに可哀想な男だ。
さぞかし風の妖精さんは嘲笑ってるだろうよ、とふと見れば、あら意外。
妖精さんはこれまでにないくらい嬉しそうに微笑んでいた。

…そうか、そうか。
君は俺を馬鹿に出来て、卑下できてそんなに嬉しいかい。
俺は半分いじけた。
そこでまた予想外なコメントが投げつけられた。

「風の声の聞き方、知りたい？ヘイロン」
俺の名前…は、風に聞いたのか。
それはともかくこの風の妖精は純粋に喜んでいるみたいだった。

出来ることなら聞きたいさ。そして、言ってやりたい。
プライバシーを持ってくれ、と。
いや、無駄だろうが。
「知りたいさ、当たり前だろう」
「信じることさ」
「…へ？」
「だから、信じるんだって。自分は風の声が聞こえるって」
…予想はしていたがな。こういうとこだけは王道を踏むんですね。

少女はすっかり風と仲良しになったらしく、水と風に混じってキャッキャ言っている。
風の妖精は満足げに少女を見ていた。
「龍に名前、あげてないんだね」
「ん？…あぁ」
俺も一緒になって少女を遠巻きに見つめた。
「やっぱり怖いから？」
妖精が呟いた。怖いって、龍だってことがか？そんなわけはない。
怖かったら当に逃げ出している。
俺が黙っていると妖精は独り言のように続けた。

「別れが怖いんでしょ？名前なんてつけてしまったら余計に執着が湧いちゃうもんね。分かってるんだ。いずれ別れがくるんだ…って」

そんなこと。

「いや」

「嘘言わないでよ」

妖精はフワリと立ち上がった。

「でも僕は風にも一人ひとり名前をつけてる」

《コワインデショ》

いたずらな声が聞こえた。

…今の…。

「そう、風の声。今のはジョセフィーヌ」

俺も土を巻き上げて立ち上がった。

「ホントはもう決めてるんだ」

《シッテルワ》

風が微かに笑った。

4．わがままま娘（前書き）

ヘイロンは結局、龍をテティスと名付けた。

4．わがまま娘

4．わがまま娘

「テティス！ほら、危ないだろ」
岩の上で風と戯れていた娘、テティスは、後少しで落ちそうになった。俺に抱きかかえられたまま、テティスはまだ興奮が覚めやらぬようで目をキラキラさせている。
「だってヘイロン！もうすぐ、こ…」そこまでテティスが言うと風がいたずらに吹いた。

《コルトーガクルノ》

楽しそうに歌った。この声は、いつかの…
「ジョセフィーヌじゃないか。やぁ、ヘイロン、テティス、遊びにきたよ」風の妖精が楽しそうに笑った。
「きたか、コルトー」

水がない。

雨が降らない。
分からない。
だからってなんで僕が――？
だからってなんで――…。

「そろそろ来る頃だと思っていたんだ」
俺がそういうと、さわっとジョセフィーヌが優しく頬を触れて、鼻歌を歌いながら去っていった。

「ジョセフィーヌ、またね」
去っていった方に手を振ってから、コルトーはクルリと向きを変えて俺を見た。
「だってテティスの誕生日だもんね」
新しい風がまたやってきてテティスの髪をなびかせた。
「誕生日！！」

ダレカ、ダレカ、ダレカ…
ココニキテ、ココニキテ、…
ワタシヲ…ワタシヲッ
ミ…テ……

はぁっはぁっ…
少年の荒い息が虚しく響く。崖の下。

どうやら僕は死ねなかったらしい。…別に僕は死にたかったわけじゃないんだけど。
街の奴らは、僕が死ななきゃ困るらしい。

街に生け贄の風習があったのは聞いていた。
でも、ずっと豊作も続いてたし、僕たちの街は戦争でも勝ってお金もいっぱいあったし、そんなのは、もう昔の伝説だと思ってた。

――去年までは。

ザッザッ
身体に巻きに巻かれてしまったロープをほどこうと暴れるたびに身体がこすれて血がにじむ。
もう痛くもない。
それよりもこすれる音が木々と岩の間によく響く。
それが悲しかった。
もう誰もいない。

もう誰も――僕を助けてくれる人なんていない。

ザッ

やっと縄がほどけた。踏み出した足が真っ赤だった。
足音だけが、誰もいない森に響いてる。
動物すらいないみたい。

誰にも会わないまま、僕はここで飢え死んでしまうのかな。
それだったら、もういっそ動物に食われて死んでしまいたい。

一人で死ぬのは悲しすぎるよ。

僕は立ち止まった。

「ここは何処なんだ」思わず呟いた。

ココハドコナンダ
ドコナンダ
ンダ…ダ……

こだまする。まるで僕を笑ってるみたいに。
「やめろ!!」
ヤメロ!!
ヤメロ!!
メロ…ロッ…

怒鳴ったはず僕の声が消えいくのが、むなしかった。
馬鹿みたいだ。

こだまなんかに。
こだま……。
僕は泣きたくなった。
「おばあちゃん…」
チャンッ
ン…
呟いた台詞がこだましたけど、僕はもう怒る気にはならなかった。
「君はエコーって言ったね」
僕は木にもたれかかって呟いた。けど、もうこだまは聞こえなかった。

「テティス、これプレゼント」
コルトーが何か差し出した。風の妖精らしくなんかメルヘンなものかと思いきや…
「服かよ」
俺は突っ込んだけど、テティスの嬉しそうなキラキラの瞳を見てしまってはすぐに
「でもまぁありがと」

と付け足すしかなかった。
クッソ…。可愛らしい純白のワンピースを手で身体に合わせて喜ぶテティスを見て、すでに負けた気分がした。
金色の美青年に、銀色の美少女。
へいへい、お似合いですね。どーせ俺なんて黒いし、黒いし、美しくなんてないし、ただの人間だし、ただの保護者…。

「ヘイロンもあるんでしょ？」コルトーが笑った。
からかうような目つきで。コイツには何でも見透かされているようで怖い。つーか、俺が分かりやすすぎるのか…。

「あぁ、勿論」
俺はズボンのポケットに手を突っ込んだ。
――――ん？

あ、いや、こっちにいれたんだっけな。
胸ポケットに手を突っ込む。
「――――っ」

いやいや、もしかしたら、走ってる途中で…。
とかなんとかやってるうちに、俺は上裸になっていた。

「プレゼントは俺――とか、ヘンターイ」
コルトーが棒読みで言った。目が笑ってる。それに答えるように。
《ヘンターイ》やんちゃな風が俺の服を飛ばした。

「ばっ！！んなわけねぇだろっ！！」
「いやん、赤面しちゃって。説得力０だよ」
焦る俺を楽しそうな目つきでからかって、それからやけに真剣な目つきになったと思ったら、くるりとテティスの方に向き直った。

「ヘイロンはものすごく変態だから、テティスは捕って食われないように気をつけなきゃダメだよ」
と人差し指を立てた。
テティスは目をぱちくりさせた。
くそー！！妖精がイタズラ好きってのは本当らしいな！！

「ヘイロン、私たちも食べるの？」
「食べるか！！」

あ。

食べる――そうだ！！思い出した！！
「あの岩のとこだ！！！！！」

《クダモノトリイッタトキオトシテタ…》
そよ風が笑った。
「おい、ならそんとき教えてくれよ！！」
《ダッテ、ヒツヨウナサソウダッタ》
ふふふっと言い逃げしやがった。

くそ。人が苦労して選んだものを必要なさそうだなんて……。
そう言われちゃ余計不安になるだろ！
だ…だって俺、女の子にプレゼントなんてあげたことないし、何あげたら喜ぶかなんて――分からないし…。

テティスは、うなだれる俺を見て心配そうにしている。

いやいや、テティスはこの俺の娘だ。
こんな綺麗で純粋な子が俺のプレゼントであろうとなんであろうと喜ばないはずがない！

「ちょっと行ってくる！！！！」

ヘイロンがよたよたと走っていった。

しばらくポカンとしていたテティスが言った。

「ねぇ、コルトー、捕って食うって何？」

「それはねぇ……」

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ．

5．木霊と風

5．木霊と風

なにもしたくない
なにもみたくない

みてもみないふり
きいてもきこえないふり
ふれてもふれないふり
なにもしたくない
なにもみたくない
なにもかんじたくない

なにのいみのないわたしが
なにのいみもないせかいに
なにもしないで
なにもみないで
なにもきかないで
なにもいわないで
なにもないように
いまここにふたしかにそんざいする
それになにのいみがあるのだろう

でも

なにもしたくない

なにもみたくない
だからきえることもできないでいるんだよ
いまここに
いることだけをくりかえして
なにもしたくない
なにもみたくない
だってもう…

カサッと音がして目が覚めた。
「――風か」
何かがいたらと期待しただけに少し寂しくなった。
結局、何も“いない”じゃないか。
葉っぱが揺れて音を鳴らす。僕の体温を奪いながら、風は吹いていった。

おばあちゃんの葬式の日もこんな風に北風が強く吹いていたな…。
僕の家族はおばあちゃんだけだったのに、呆気なかった。
こんなに死んでしまうのは簡単なんだと思った。
馬鹿だったみたいだ。
今頃になって僕は必死に生にしがみついてる。一人で悲しくて、
生贄として誰にも守られることなく見捨てられて…絶望したと思っ
たのに、それなのに、僕はまだどうやって生きるか必死で考えてる。
おばあちゃんも、必死だったのかな。

最期のその時も僕を思ってくれていたのかな。

あのときは悲しくて悲しくて、それしか覚えてない。ただ僕は泣
いてしまったことを覚えている。
どんな悲しさだったのかどんな深い入り混じった感情だったのか、
一年しか経っていないのに、いつのまにか忘れてしまった。
そりゃ今だって悲しい。おばあちゃんがいないのが。
でもどんな悲しみかなんて本当に思い出せない。
あのときは、もう僕はこの悲しさから抜け出せないだろうと思っ
たのに。
僕が薄情なのかな。

悲しさから抜け出せない……。

森に入って、思い出せたことがある。
おばあちゃんが、まだ僕がずっと小さかったときに教えてくれた
いっぱいのおとぎ話。
僕は、木霊の妖精の話が嫌いだった。
うじうじして馬鹿みたいだと思った。そう言うと、おばあちゃん
は決まって
「いつか分かるときがくるよ」

と笑っていた。
おばあちゃんが死んだとき、分かった気がした。
けれど、今にはこんなだ。
やっぱり僕は薄情なのかもしれない。

――寒い。

ここには座ってられないな。
僕が立ち上がったときだった。
カサリと何かを踏んだ。
「これは…？」

「くそっ」
どこに落としたんだ！？
折角用意したテティスへのプレゼントを落としてしまうなんて…
不覚だ！なんて俺は駄目な男なんだー！
俺はもう親失格かもしれん…。
む…娘の誕生日にちゃんとしてやれないなんて……。
「うわぁぁあ…」
いつの間にか嘆きが音となって口から出てたみたいだ。変な声が喉の奥で響いた。

《ヘイロン、ホントバカダナ》
北風が笑いながら走った。
「っるせ」
言われなくたって分かってる。俺は馬鹿だ。
《オトコノコガヒロッタミタイダ》

俺の足に触れる。うう寒い。北風のやつ…わざとだろう。この小僧めが。
俺はデリケートなんだぞ。
が、今日のところは見逃しておいてやろう。
「カンタロー、男の子は何処なんだ？」
重要な情報を与えてくれたからな。

《ガケノシタノモリノオクノドウクツ》

北風小僧のカンタローは、そう言って南に木の葉を散らせた。
「そうか、ありがとな」
聞こえるかどうかは置いておくとして、俺は去っていった方に向かって言っておいた。一応な。

崖の下の…。

なんだか嫌な予感がしなくもないが、行くしかないだろう。
すべては我が娘のためだ。

《コルトー、コルトー》
風が呼んだ。
「なんだい。どうしたの？」
《エコーが起きてるわ》
《エコーが》
《やっと戻れるかもな》

周囲の風も一生に騒ぎ出した。
「エコーが？そりゃまた珍しい」
僕はテティスの頭を撫でた。
「今日は誕生日に加えていいことが沢山ありそうだね」

僕はそう言ったが、やはりテティスは不思議そうな顔をした。
「エコーって誰？」

やっぱりそう質問して、目を輝かせた。ヘイロンの奴、一見ただの間抜けだが、教育者としては見くびっては駄目だな。
この龍は本当に純粋無垢に育ってる。

「エコーは木霊の妖精なんだ」
「妖精！！じゃあコルトーの仲間？」
「大きな仲間で言えばね。元々は…って言ってもまぁ物凄く昔の話だけれど、エコーは木霊の妖精じゃなかったんだ。なんの妖精だったかは忘れてしまったけどね。でもナルシスって人間に恋をして振られたショックで声だけになってしまったんだ」
「消えちゃうの、…恋って怖いものなんだね」

テティスは悲しそうに言った。

「怖くなんか、ないさ。ただ少しエコーが臆病なんだよ」
いまに戻ってくるしね。でも、一度深く傷つかないと分からないこともある。しかし、彼女は
「失敗を恐れて、人の真似しかできなくなった。それはとても、寂しいことだけどさ」

僕は息が漏れた。

エコー、しっかりしてくれないと妖精が弱いみたいじゃないか。
龍に弱いって思われちゃったら世界にそう思われるのと同じなのになぁ。

「やっぱり怖いよ」
テティスが呟いた。

「素晴らしいもののはずさ。ずっとこの世界にあるんだからね。いつかわかるよ」

僕はそう言って微笑んだけど、本音を言えば、そんな“いつか”はきてほしくない。
テティス…龍の成長は早いって知ってるさ。
でも――――…。

6．いらないよ、そんなの

6．いらないよそんなの

いいんだよ。
君は悪くない。
君のせいじゃない。
君はそのままでいいんだよ。
すべてほっぽっても君がしたいようにすればいい。
私がやるから。

そう言ってくれたら楽だろう。
そう言ってくれたらどんなに楽だろう。

でも嫌だ。

そんな偽善者は嫌いだ。

いいんだよ――本当にいいのなら言わない。仕方ないから別に“いい”。
私がやるから――本当に心からのいいひとはそんなこと言わない。
私がやって“やる”んだろう。

だから偽善者が嫌いなんだ。

私がやってあげてますよー私がやってあげてるんですよー。
そんなアピールをして、何をして欲しいのか。

そんな悪徳業者みたいな真似するから偽善者なんだ。勝手にやっ

ておいて、見返りを求める。だから偽善者なんか嫌いなんだよ。

なのに肝心なときには絶対に手は差し伸べない。

すべては善意じゃなくて、貞操なのだから。

世間の目で動くのだから。

そんな意味では僕自信も嫌いだな。

結局、世間のためにしか動けなかった。こんなに世間が嫌だと言っていたのに、世間にこんなにも頼っていた。見捨てられて、やっと気付いた。

こんなに悲しいんだと。

独りで死ぬのか…。

「はぁーあー…」

馬鹿みたいだ。笑いが混じってしまった。

結局、何人いたっていまの僕は一人なんだ。

さっき拾った袋を握った。…ここに人が通ったということだろうか。

まさかな…。

こんな辺境に人が通るなんて。洞窟から風の吹き荒れる外を見て、確信した。木々が生い茂って、黒く蠢いて見える。風が通り過ぎる度に轟々と木々は唸って寒さにしかめ面をしているみたいだ。まるで、何かの侵入を拒むみたいに風はそれでも吹き荒れて、もう大地は岩がゴロゴロと頭を出している。

こんなところに人が通るはずがない。

まぁあるとしたら、風が飛ばしてきたのだろう。

ああ…でも…寒い。
身体を丸めてみたものの、あまり効果は感じられなかった。
地面の岩についているお尻や足からゾワゾワと冷たさが伝わってくる。
さっきから身体の震えが止まらない。

「岩場の洞窟か…」
憂鬱になりそうで思わず吐き出した。言ってしまえば楽になると思ったが余計面倒になってきた。あそこには近年稀に見ない悪戯好きで乱暴で有名な北風がいる。ヤマセという名だったとは思うが、なんでも遠い異国でも名の知れた不良で人間や植物を困らせているらしい。
コルトー曰わく物凄い冷血漢で、自分がいかに颯爽と通るかしか考えていない、命なんてどうでもいいようなやつらしい。
つまりは、身を切るような寒いやつだってことだ。
しかし――…男の子…か。
風の噂だし、妖精と人間を見間違うことはないだろうが…。
岩場の洞窟だなんて、治安（？）の悪い、しかも大体この森に人がいること自体が珍しいってのに、男の“子”がいるなんてどう考えても不自然…。も…しかして、な。岩場の洞窟と言ったら、あの街の外れの崖の下だった気がするが…いやいや。
あそこでは、もうやってなかったはずだ。

…あーあ…やだやだ。
「なんで落としたんだ俺…」
嫌な予感が的中している気がしてきた。

「コルトーは、恋しているの？」
あたりは暗い。薪を炊いて、ヘイロンの帰りを二人で待っている。
薪の明かりが、テティスを下から照らした。伸ばしっぱなしにしていた髪がボワッと銀色に光る。

「僕は生まれたときから恋をしているよ」
「誰に？」
テティスが僕の方に、ちょっと楽しそうになって身を乗り出した。
「髪が燃えるよ」
クスリと笑ってしまった。こういう少しマヌケなところは成長しても変わらないな。親に似たかな。
ヘイロンもヘイロンでプレゼント落とすし…。
「もっ…燃えないもん。で、誰に、恋してるの？コルトーは」
ずいとやり過ぎに後ろに下がってまた楽しそうに目を輝かせた。

「風たちだよ、すべての風は僕の恋人さ」
「なあんだ。やっぱり。恋って怖くないの？」

念を押すように、テティスはまた聞いた。
「毎日が飛び跳ねて、キラキラしているよ、彼女たちみんな美しくて可愛いから。僕の場合はね」
《オセジガウマイワネ》
火で温まったレナが耳元で囁いた。
「みんなって、コルトー…そんなにいっぱいと?あのね、前本で読んだんだけどね、それは浮気って言うんだって。悪いことなんだよ」
テティスが諭すように訝しんだ。
「テティス、それは人間の下らないルールだよ。僕らはいいのさ」
すべてを本気で愛せるからね。だって風の妖精だから。
僕はあえて、“僕ら”が誰なのかは言わない。
テティスも聞いてこなかった。
ただ納得いかないような顔で呟いただけだ。
「私は一人だけがいいな」
何も言わなくても、“僕ら”の括りは十分に承知していたみたいだ。ああ。なんか、ヘイロンは良い親すぎたかもしれないね、主さん。計画外に龍の成長は早いよ。
「にしてもヘイロンの奴、遅いな」

「おい、お前どうした？」
声が聞こえた気がした。寒くて眠くてもう身体は動かない。
いや、もういっそどうでもよかった。
男の人がその後何度も呼び掛けたような気もしたけれど、僕はもう答える気もなかった。
どうせ僕が生け贄だと知ったら…。
最後に男は僕を抱きかかえて歩き始めた。飛んだ苦労をさせてしまったな。…僕はどうせ生け贄だのに。
でも、それでも。
男の人の肩は、腕はやっぱり暖かった。

「ヘイロンが帰ってきた！！」
テティスの耳と鼻がピクリと動いた。
「…どこにもいないじゃない」僕が呆れると、匂いがしたとテティスは自信満々で言った。
「ヘイロンってそんなに臭いの？」
「誰が臭いか」
ふいに後ろから声がした。…ホントだ。衝撃的だな。…龍は犬なみの嗅覚も持っているのか。

「いや、なんでも…」
そう言いながら振り返ると、更に衝撃的な絵が待っていた。
「ヘイロン…ついに男の子にまで手を出して…」
「あほっ！！違うわ」
頭に、目をふさぐようにして掛けられた包帯に、千切れた鎖と足かせをした男の子をヘイロンはお姫様抱っこしていた。
「じ…じゃあ誕生日プレゼントかい？」かろうじて僕は冗談を言えた。
ヘイロンは苦笑いをして
「まあそうかもな」
人間たちからの心許ないプレゼントだとも言えると呟いた。
その見た目から明らかだった。
その男の子は、正しく、テティス――龍への捧げ物だ。

「ったく、趣味が悪いな、あの街の奴らは」
俺は、未だ身体を震わせ目を覚まさない男の子を見やった。
「捧げ物を贈る発想までは理解できるけど」コルトーは眉間にしわを寄せて、傷口を触った。風がふわりと感じられたと思ったら、いつの間にか、血の流れ出ていた傷口が乾いて瘡蓋になっていた。
なるほど風の妖精の力はこんな風にも使えるらしい。

テティスは案の定、ポカーンとして口を半開きで俺らを交互に見比べている。
「ヘイロン、この人、どうしたの？」
やっぱり。
俺のテティスはこうでなくちゃな。
これだけ言っていても勘付かないくらいの闇に対しての純粋さ。
「コイツは恐らく街のやつらからのお前への生け贄だ」
俺がそう言うとテティスは言葉を失ったようで、ただ黙って俯いた。

「そんなの、いらないよ」

しばらくして、テティスは震えながら小さく呟いた。
「はは」
俺は思わず笑った。…そうだろうな。
テティスはそうだろう。
俺の娘だからな。
「でもな、テティス。ただ、いらないで終わらせちゃいけないな」
俺が微笑むとまたテティスはポカンと俺を見つめた。
これは、俺が生け贄だったから言えることだろう。
生け贄だったから分かることだろう。
だから、だからこそ、コイツには分かって欲しいのだ。
これからずっと長いときを生きていくコイツには。
「コイツがなんで生け贄に選ばれたか、考えてみることだな」

7．少年と少女

七章

木々が風に揺れている。

枝々が個々に揺れて揺れて、ムクムクと、その群集が生きているように見える。

いや、生きてはいるんだが、な。

まだ秋のはじめのこの季節、赤や緑や茶や黄の葉っぱが混じりあってまだらな群集がムクムクと揺れている姿は、とても美しいとは思えない。少なくとも俺には。

秋も半ばになれば、葉たちはきっと紅一色に染まって、強調性を持って栄え映えに一面の紅葉の美しい姿を見せてくれるのだろう。夕暮れにもなればなおさら。

だが、俺は今の季節の方が好きだ。

紅葉し切った葉はすぐに散ってしまうと分かっているから寂しくなるのか。

あるいは、その美しさが、自然の偉大さが、このちっぽけな人間の俺からは遠い存在に思えてしまうからだろうか。

いや――…それもあるかもしれないが、やはり俺は、この期の、弱くなっていこうとする太陽に縋ろうとするまだらな葉が必死な葉が好きなのだ。

俺は、そこに違和感を確かめたいのだと今になって気付く。

『別れが怖いんでしょ』

なぜかしらいつかのコルトーの言葉が浮かんだ。

「ふふっ」笑いが漏れてしまった。

そうだ、俺は恐れている。
今までは見ることもなかった木々や森なんかについて考えるくらい。
人間の俺が、テティスとどれくらい近いところに居られるかなんて…。
そんな。
阿呆らしいな。
大分、語ってしまった。
いいんだ。そんな未来の下らないことは今はどうでもいい。
ただ…。

「コルトー、あそこの木のあの部分、ほら、あそこ…ものすごく違和感を感じるんだが」
俺は指で木の太い枝の少し上あたりをさした。
「ん？どこどこ？」
コルトーが俺に顔を近付けた。
「ほら――あそこ…」

コルトーも見つけたようでクスリと笑みを漏らした。
「あれは…ううん。言わない方がいいかな」
そして意味ありげに笑って、腕を組んだ。
「時はくるべくしてくるように、見えると分かっているものは見ようとしなくたって実は見えているんだよ」

…また謎かけみたいなことを……。
前々から思っていたがコルトーという妖精は小難しい哲学的なたとえ話が好きらしい。

「まあよく分からないがいつかは分かるってことだな」
俺は深い意味まではあえて追求しないでそう言っておいた。
コルトーの言う言葉というのはよく考えれば考えるほど論点は初めに戻る。つまり、はじめに受け取ったものがよく分からなくてもなんでもコルトーの想いということになるのか、まとまってないようでコルトーの言葉はとても的確すぎるくらい的確なのである。
そういうのは妖精の能力なんだろうか。

「うん、その通り」
コルトーは笑顔で頷いた。

「…んっ」
呻き声が聞こえたような気がする。あぁ、そうか。男の子が…。
状況を理解して俺とコルトーとテティスが振り返るのと、男の子が叫ぶのは同時だった。

「うわあああああっ！！！！」
「な、なんだよ」
「どうしたの？」
「――きゃああっ！！？」
俺とコルトーは、言葉を繋いで尋ねたが、テティスは純粋にびっくりしたらしく、お尻についた銀色のふさふさの尻尾をピンッと逆立てた。
「ふぅっー！！？」ついには威嚇しはじめた。
犬か！？という突っ込みはなんとか堪えて、テティスの頭を撫でてやると、今度はゴロニャンと喉を鳴らす真似をした。
テティス、…いや可愛いからむしろ内心としては歓迎なんだけどさ…頼む、理解してくれ。

お前は、龍だ。

「おいおい落ち着いてくれ。どうしたんだ」
気を取り直して、俺の後ろに隠れてブルブルしている男の子に聞いた。
「ばっ化け物だあ！！！！」
「え、あ、ごめん、俺こう見えてちゃんと人間なんだ」
反射的に謝ってしまった。そういえば、人間と話すのは久しぶりだ。村にいるときはこんなことは慣れっこだったから、今更気にすることはないが…助けてやったのに化け物とか言われると結構傷付くかも…。
一人、うなだれかけていると男の子が意外にも怒鳴った。
「違う！違う違う！お兄さんじゃなくてっ――後ろの…」
「え、僕？」
「ひっ！」
ありゃ珍しい。俺よりも金髪の美青年と銀髪の美少女を怖がる奴なんて。
いや、でもコルトーはまだしも…そうか――テティスには犬のようにフサフサふわふわで綺麗な銀色の尻尾が生えている。なるほど、化け物であることに間違いはない。
が。しかしだな…
「俺の娘に、しかも初対面のやつが化け物とか言ってんじゃねーよ！！！！」
少年が驚いた顔を見せたが、俺、ここだけは譲れねぇんだよ。
コルトーが面白そうな顔をしているのは気に食わないが、ここで黙ってはいられないのだ。そんなことは気にせず俺は言葉を繋げた。

「こんなに可愛くて美しくて優しくて愛くるしくて可愛くて可愛くて可愛くて可愛い俺の娘のどこが化け物だと言うんだ！！！」
どうだ！参ったか。男の子はひとまず黙って俺らの顔を見比べている。

「いやヘイロン、最後の方同じことしか言ってないよ」コルトーが笑った。
「うるせ、そんだけテティスは可愛いってことだ。ほらテティス、お前からもなんか言ってや…」
…れ？
――――え、テティスが俯いて耳まで真っ赤にしている。これは怒ってるの…か？怒ってるんだな！
そりゃ怒るよな！
年頃の娘が、化け物だなんて言われたらそりゃ傷付くに決まっている。

「…」

待ち構えてみたものの、一向に怒鳴る気配はなく、テティスは下を向いたまま押し黙っている。

「テティス…？」

俺が顔を上げさせると、テティスは顔も真っ赤だった。そんなに嫌だったか。
この少年め。
拾ってくるんじゃなかったな！
今にも逃げ出しそうな少年を俺は、ひとまずつまんで逃がさないようにしたがテティスはまだ黙ったままだ。

「テティス、どうした？化け物って言われてそんなに傷付いたか？」
「…」
「おーいテティス？そんなに気にすることないぞー？お前は俺の知る中で一番可愛い…」

そこまで言いかけると意外なものが飛んできた。――――テティスの張り手だ。
「ヘイロンのバカ！」こんな言葉を残して走り去ってしまった。
な…。
「なんだってんだ…？」

「贅沢な子ね」
声が聞こえた。
「誰？」私がそういうと嘲笑うような声で木霊が返ってきた。
「やめてよっ！」
メテヨッ…
テヨッ…
ヨッ…
今度もまたいじのわるい木霊が響いた。

「どうして真似なんてするの」
木霊が止まった。
「私はわたしでいたくないの」
「だって」
「わたしは全て否定されてしまったから」
「だから」
「わたしなんていらないの」
輪唱のように女の声が響いた。
「わからないな」私は呟いた。
「エコーさんって言ったっけ？」
もう木霊は聞こえなかった。

「お前のせいだぞー！テティスにっ…テティスに嫌われちまったじゃねぇかああ！」
俺は思わず男の子の胸ぐらを掴んだ。
「くくっ」横でコルトーの笑いが漏れる。
「わっ笑いごとじゃねぇーんだぞ！」
俺は対抗して怒鳴るも逆効果のようで、今度は男の子まで笑いだしてしまった。
…な。なんだってんだ。
コルトーに至っては腹を抱えて無音で震えるほどツボに入る始末である。
な。何がそんなに面白いんだよ！

とりあえず、俺が笑われていることは分かるのに、理由が分からないというのは普通に笑われるよりずっと屈辱的であった。
「くそっ…なんだよっ…二人して俺を…」
そこまで言いかけて力尽きた。すると、やれやれといった様子でコルトーが溜め息を漏らした。
「大丈夫だよ」
男の子にまで呆れるような目で言われる。
「あれは嫌ってるんじゃないでしょ」
――――は？
いやいやいや。だってテティス、震えるくらい逆鱗に触れたみたいに真っ赤になって怒っていたじゃないか。それに、最後…。そうだよ、ビンタだよ、ビンタ。ビンタしてあの子走り去ったんだぜ？それがもう怒ってなかったら何を怒ってるっていうんだよ。カンカンに怒ってる証拠だろ…。そこまで怒らせちゃったら嫌われるのも当たり前…。
はぁ…考え出したら、自分で自分がムカつくくらいだ…。

「ホント、ヘイロンって馬鹿だよね」コルトーがまだ笑い出しそうな声で呟いた。
「分かってるってそんなこと…」
俺が見るからに肩を落としていたからだろう。
男の子がさっきまでと打って変わって、申し訳なさそうにしょぼくれた。
「あの…さっきはごめんなさい…僕、ビックリしちゃって…」
「いいんだよ、悪ぃ、俺が言い過ぎた」
俺がそう言って、男の子の頭にポンッと手を置くと、コルトーが笑った。
「まぁ、化け物っていうのも案外間違っちゃいないしね」
ポカンとしている男の子をしり目にコルトーは続けた。

「だって、レムだって、ヘイロンだって、化け物でしょう？」
「…え？」男の子――いや、レムは呟いた。
――あぁ、そうか。
なるほどな。
「確かに」
俺もコルトーの笑顔につられて微笑んでしまった。
「なんで僕の名前…？」
「風の噂に聞いたのさ」
風がふわっと俺たちをかすめた。
「結局、この世界にいる者は人間にとってすべて化け物なんでしょ」

7．少年と少女（後書き）

セリフが多いですね…。
最近、かなりサボっていたので思うようなリズムの文章がかけませんＯＴＺ
やっぱり小説って難しいと改めて感じるこのごろです

7．5　ヘイロン（前書き）

本編からそれてみました。
生贄にされる前、村の少年だった頃のヘイロンくんのお話です

7．5　ヘイロン

7．5　ヘイロン

「君、気持ち悪いね」

大体、初対面の奴は俺を見て、そう思うことだろう。が、しかし、面と向かって言われたのははじめてだった。一瞬驚いてしまったが、無論、傷付くこともない。今更だ。なんたって、理由は明らかだ。

――俺の髪の色は、真っ黒。金か銅か、たまに赤か。そんな村の中で、俺はいやに目立つことだろう。

「知ってるさ。俺の一族はこうなんだ」

綺麗な金髪の少年は俺の言葉に驚いたのか、目を見開いた。それより、俺は驚いていた。発言とか、少年の美しさとかでなく、登場の仕方に。木の上から、膝でぶら下がって、逆さに出てきたのだ。しかも、いきなり。

「そうでもなかった気がするけど」そんなことを呟いて、少年は木から飛び降りた。

…は？

「俺の親を知ってんのかよ」

そんなはずはない。俺と同じくらい、いやそれ以下に見える少年が、俺の父さんを知っているはずがない。なんたって、俺も知らないのだから。

俺の父さんは、俺が生まれる前に森へ出された生贄だ。

それに、母さんのことなんて知ってる奴もいない。

俺は、孤児院で育った。要するに、この村に俺の一族を知る子供なぞ、居ないのだ。

そう言われて見てみると、こんな少年、この村で見たことはない気がする。大体、寂れたしがない村の子供にしては、気品が有りす

ぎる。綺麗な金色の髪だってそうだし、人形の様にくりりとしたエメラルドブルーの瞳だって、シルクの服だって…。並み大抵の村人とは確実に違う。なんつーか、オーラ…みたいなのが。

「お前、何者だ」

俺が睨みつけると、その少年は「ふふふ」と微笑んで、転がっている丸太に腰掛けた。

「いや、僕はね、たださ。君は、どうしてあれだけ言われてててめげないんだろうって、その根性というか、粘り強さに恐怖したんだよ」

あれだけって…？

「髪がどうなこうな、って影で言われてるじゃない。知らないわけじゃないでしょう、ヘイロン」

その少年の口ぶりからすると、少年は俺を、少なくとも髪色で偏見しているわけじゃないらしい。

よく分かんないけど、つーか、外部の奴…？なのかもわかんねぇが悪い奴ではないらしい。

「憐れむことはあっても、村人（あいつら）を恨んだことはねぇよ。外見しか見られないなんて、人生損で可哀想な奴らだよな。つーか、どうやって名前…」

俺がそこまで言いかけると、また少年は木に登っていってしまった。顔に似遣わない早業で。

「人に質問したなら、自分も質問にこたえろ！」

叫び声も空しく、少年の影は消えてしまった。…くそ。なんなんだよ、あいつ！

踵を返して森を出ようとしたとき、かすかな声が聞こえた。

「風の噂に、聞いたのさ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「…ロン！ヘイロン！」

テティスが俺を覗き込んでいる。岩場で日向ぼっこすると言い出したコイツに付き合っているうちに、寝てしまったらしい。

「どうした？」

「コルトーがね、遊びに来てくれたよ！」

テティスは、まだセリフも言い終わらないうちから、風と一緒になってコルトーと遊び始めた。

「よくここにいるって分かったな」

俺がわざとらしく言うと、コルトーもわざとらしく微笑んだ。

「風の噂に、聞いたのさ」

…あれ。

…まさかな。

8．人間と化け物

「私、あなたのことが好きなの」
思ったより、出てきた声が小さくて震えていた。自分でも気付かなかったけれど、相当緊張してしまっていたみたい。覚悟は決めてきたはずなのに。
青年、私の想い人は、口を開いた。
どんな言葉で私を拒絶するのだろうと、一瞬身構えた。

「君は、エコーと言ったね」

あら、意外。
彼は、微笑んで私を見た。
これは、好感触だわ。何か気の利いたことでも言うべきかしら。言うべきよね。でも…何を？私には分からないわ。だって、彼は――…。色々、考えても私は沈黙。でも、いくら悩んでも言葉なんて一つも出てこなくて、私はただ頷くことしか出来なかった。
すると、なぜだろう。彼は今までに見たことのないくらいの笑顔で言った。

「君も化け物なんだろう」

「僕はコルトー、風の妖精さ」
コルトーが珍しく優しく微笑んだ。レムはもうビビることはなく微笑んだ。
「向こうの崖の上の町から龍への生贄、レム＝シェルリンです」
やはりな。生贄ということは…。
少年の身体の至る所にできた切り傷や青あざを改めて見て、溜め息が出てきた。つまり、この少年の傷跡は全て、自分で転んでできたわけでもなく、森でできたわけでもなく、紛れもなく、哀れな人間によってつけられたのだ。
あいつらは、本当に、それで人間たちが赦されるとでも思っているのだろうか。
罪を償うことすらせず、罪を省みることすらせず、あまつさえ、気付きもせずに罪を重ねる。
あたかも、自分たちが全てだと言わんばかりに。
「君も“化け物”だったんだろう」
俺は、少年の髪に触れた。
そよ風が過ぎ去って、俺の髪も宙に舞わせた。
「うん、僕の髪の色が金色だから。僕は化け物なんだって」
「奇遇だな。俺も村で一人だけこの髪色で生贄となった」
俺の言葉に少年は心底驚いた。感情が溢れ出したのか、レムは独り言のように呟いた。
「どうして…？」
「どうしてってヘイロンが人とは違うからでしょ」
俺が答えるかわりにコルトーが言った。
「君もそうでしょう？」
「うん…」レムは力ない返事をした。
そりゃ驚くよな。俺だって驚いた。自分を差別してきた金色が、ある村では差別されていて、俺のこの黒色が、今度は差別している

だなんて。大きな違いだ。
でも対した差なんてない。本当は変わらない。結局のところ、その根本的な心は同じなのだ。
俺が溜め息をつきかけた、その時だ。

《テティストエコーガ…》
《エコーガオキタケド》
《ナンカテティスガタイヘンラシイナ》

風たちが一斉に騒ぎ始めた。
「さて、テティスとエコーをどうにかしなきゃね」コルトーが腕を組んで歩き始めた。
「西の外れだってな」
俺も、自分でもじじくさい気がしたがヨイショと立ち上がった。
《ヘイロンジジクサイワ》
そんな呟きが聞こえた気がしたが、今は見逃しておいてやる。
「っるせ」
「ははは」こ、コルトーもまぁ今のところだけ見逃しておいてやる。
俺は心が広いからな、いまは何よりもテティスだ。

レムは何がなんだかといった様子だったが、とりあえず俺らのうしろについてきた。

ひどい、ひどいじゃない。
化け物ってなんなの！化け物って、化け物って…そんな言葉で片付けないで。
私をそんな言葉で切り捨てないで！
ちゃんと見て。私と貴方はほんの少し違う。ただそれだけじゃないの！
その、ほんの少しもダメなの？人間（かれ）には、その違いも許せ…ないの？
「だったら」
私は、今からほんの少しも違わないわ。ほんの少しの姿さえ、性さえ、声さえ、言葉さえ。
アナタトイッショヨ？

「どうしたの？エコーさん」龍の少女が問うた。
遠い昔のはなし。けれど、そう変わらない。
私は久しぶりに世界に姿を現して、この哀れな龍に忠告してあげることにした。
「龍さん、アナタも騙されているダケヨ。人間なんテ、どうせ、どんなに心を許していたと思っテモ、自分と違うとわかった途端…」

「やめて！」
テティスの叫び声が茂みの向こうから聞こえてきた。俺とコルトーは顔を見合わせた。
何があったんだ！？

あせって、精一杯走り出しても、不安は膨らむばかりだ。一歩、一歩と歩数を重ねるたびに、不安は募り、嫌な予感は増してきて、そんなに距離を進んでいるわけでもないのに、息が切れてくる。一歩が重い。この一歩が俺の不安感や緊張をすべて背負っているみたいに。

やっとの思いで走り続けてテティスの後ろ姿がみえたとき、ほっとして言葉が出てこなかった。いつの間に、テティスは俺の中でこんなにも…。生贄になる前は大切なものなんて一つもなかったのに。できるなんてことすら考えていなかったから。いま、こんなにも苦しかったのは、…そうだな。自分でも驚いてしまうことに…。

俺が息を整えて、声をかけようとしたときだった。テティスの後ろから、女が現れた。

そして更に驚いたことにだ、テティスが苦しそうに叫びながら女を叱るように諭すよう平手で殴ったのだ。

「ふざけないで！人間なんて、だなんて！結局は貴女を同じじゃない！人間なんて下らない言葉でくくって縛り付けて！貴女の今言っていることは、私や貴女を化け物だって言っている人間たちと同じじゃないの！」

テティスの握った拳が下におろされ震えている。

「確かに、そういう人間だっているかもしれない。でも、そうじゃない人間だっているもん。ヘイロンだって…」

テティスが俯いた。女はここぞとばかりに巻き返しを図ろうと、口を開いた。

「でも、アナタだって、その人間カラ、逃げてきたじゃナイノ」

その言葉にテティスは微笑んだ。

「貴女には、そうみえたの？」

「それ以外に何があって？あの生贄の少年に化け物って言われて、気が付いたんでしょう？」

女は勝ち誇ったかのように笑った。

「違うわ。逃げてなんかいない。恥ずかしかったの」
「…どういうこと？恥辱？ほら、それならやっぱり」
「ソレも違う。私はね」
テティスは頬を染めた。
「ヘイロンが好きなの」

…え？

9．習性

「私は――ヘイロンが好きなの！！」

…え？

す、好きって？知ってるさ、そんなこと。何年母親がわりを勤めてきたと思ってるんだよ。一年だよな。そんな親の俺が大好きなんだろ。…いやいやいや。

自分にどれだけそう言い聞かせようとしても、もう理性ですらそうでないといい放っていた。

あのテティスの表情は、見たことない。

あんな表情（かお）…はじめて見た。

つまりは、親である俺ですら見たことのない表情（かお）ってことは…。

平常を保とうとしたものの、上がる心拍数と高揚してしまった呼吸に邪魔されて不可能だった。

カサリと落ち葉を踏んでしまって、二人に気付かれてしまったようだ。

テティスはこちらに振り返ると見る見るうちに赤くなって、

「いまの聞いてた！！？」

と凄い勢いで迫ってきた。

「いいい、いいいや！！聞いてない聞いてない！」

俺は急いで全力で否定するも、この赤面と焦り様ではどうも説得力がなかったらしい。

「嘘つき！聞いてたんでしょ！！」

決めつけられて、俺は一瞬の間を作ってしまった。

「…聞いてないって！！」

もう完全に聞いていたことは確定してしまったらしい。非難の目を向けるテティスに俺はハハハと笑って誤魔化すしかなくて、その

後、二人の無言の圧力に負けて「それじゃ」、と引きつった笑顔のまま去っていくこととなった。二人から姿が見えなくなるまで俺の背中にはブスブスと視線が刺さってきていた。…怖かった…。

つーか、コルトー。何処行きやがった。

「意味が解からないわ」
エコーが力なく呟いた。
「なんで、好きなのに、そんな…」
私だって、こんなことしたくない。でもね、ダメなの。好きなのに、見られるだけで恥ずかしい。
コルトーの嘘吐き。恋、なんて良いことひとつもないじゃない。このままじゃ、本当にヘイロンに嫌われちゃう。ホント、どうしちゃったの、私。

「こういうのを照れ隠しっていうんだよ」
いきなり、横から声が聞こえた。
「…コルトー」私は、綺麗な金髪の青年がいきなり現れる瞬間を見てしまった。
なんだか、あまり幻想的でもなければ美しくも綺麗でもなかった。

なんか…キモい。いつもコルトーって、いきなり現れるけどこんな風に登場してたのね…。風が吹き荒れる中で散り散りになったからd…いや、表現するのは止めておこう。
「照れ隠し？」
私は気を取り直して聞き返した。なのに、
「やぁっぱり、テティスはヘイロンが好きだったんだね」
コルトーはそう言って意味深に、それなのに何処か寂しそうに、ふふふと笑った。
「質問に、答えてよ、コルトー」
私はもう一度問うた。今回に至っては、コルトーはこちらを見向きもせず、エコーの方へ向き直った。――全く、なんなの？また今度はなんのイタズラ？私がため息を付きかけたときだった。コルトーは、また意味深に笑って呟いた。
「ねぇ、エコー、知ってる？人間ってね、好きなひとには素直になれない、なんともめんどくさい習性を持っているらしいよ」

9．習性（後書き）

やたら短いですが、ここがきりがいいので…。
すみません。早いペースでやっていこうと思いまして、「一話一話を」短く、読みやすい感じにしようと思ってます。
目標は、週1★
なんか、無理そうですが…頑張ります。

１０．　物語の結末は…（前書き）

レムの視点です。なんかわたしの作品は全部視点がころころ変わってしまうので…。
解かりにくいですよね、・・・反省。

１０．　物語の結末は…

「やぁ、エコー。最近２００年くらい見ないから。どうしたのかと思っちゃったよ」

コルトーさんが満面の笑みで言った。どうやら、僕がおばあちゃんから聞いていた昔話にでてくるエコーとかいう（僕の嫌いだった）妖精が目の前にいるらしい。

つい何日か前までの僕だったら、にわかには信じられない事実である。だけど、自らが龍への捧げ物になった上、その龍に直接会って、しかも実際に風の妖精の力をこの目で見てしまったとなると…。

なんだか、自分で言っといて悲しくなってきた。

僕は生贄…しかも、必要とされてないなんて…。

しかも、その問題の龍に至っては、まだほんの、僕と同じからいの少女じゃあないか。

そんなちっぽけな存在にみんながみんな恐れおののいていたとなると、…その分、精神的衝撃は大きい。

まぁ、そんな僕の個人的事情は置いておいても――…。

笑顔のコルトーさんに反して、エコーは皮肉った笑みを向けたのだ。

ヤヤ、いきなり、不穏な空気。

小心者の僕は、…いや、こんな場面になれてない僕は、ていうか、妖精というものがよくわかっていない一般人の僕は、もうすでにこの場から逃げ出したくなった。いえ、ごめんなさい。嘘をつきました。

逃げようとしたした。けど、逃げられませーん！

何故？何故って？そんなことわからないよ。透明な空気のような何かに服をつかまれっちゃって動けないんです★
はぁ…恐ろしい。これも風の妖精の力ってことですか。
コルトーさんの鉄火面のような笑顔を見ていると、まだ裏に隠された大きな何かを持っていそうで怖いです。

「白々しい。コルトー、アナタ、久しぶりに会ったと思えば随分と人間と仲良くなっちゃって…。――何が言いたいノ？」
やはり、僕の予想は当たり、あたりに火花が飛び散る。いや、火花どころじゃない。
あたりに風は吹き荒れ、雨は降りしきり、雷がどっかんどっかん落ちまくる。そんな幻影すら見えてくる。いや、実際、火花は飛び散ってしまっているんじゃなかろうか。僕は肝が冷えて冷凍保存されてしまうのではないかといぶかしんだ。
そんな誇張表現ーなんて笑わないで下さい。ホント、怖いんです。常人じゃないんですよ？そうです、この人たちは妖精です。可愛いキュピキュピのフェアリーちゃんなんてイメージ捨てちゃってます。そう、背景はベタフラです。
はあはあ、混乱のあまり、ついついテンションがあがってしまった。

…え、え？ちょっと待った。
今なんて言った？
２００年を…久しぶりって。いやいやいや。
いったいコルトーさんは、いくつなのだろう。

そこで、救いの手だ。
「ナルシスさんは照れ屋さんだった。それだけじゃないの？」
龍さん。
いきなり確信すぎる。しかし、いくぶんか予期していたことだっ

たみたいで、エコーは余裕の笑みで木霊した。なるほど、木霊って皮肉にも使えるわけだ。
「ナルシスさんは照れ屋さんだった。それだけじゃないの？…それだけじゃないわよ！！」
前言撤回。救いではなかった。火にあぶらかたぶら。

綺麗だったエコーの顔は怒りに歪み、妖精なはずなのに、僕には妖怪にしか見えなくなった。

それでも尚、微笑み続けるコルトーさんにエコーはよほど怒り狂ったのだろう。
パンと何かがはじけるようなおとがしたかと思うと、世界までもが歪み始めた。歪んでいく世界に耐え切れなくなって、目を閉じると、僕に飛び込んでくるのは、悲しそうな木霊の輪唱だけになった。

キミモバケモノナンダロウ？
バケモノ…バケモノ…ケモノ…モノ…ノ…
バケモノ…バケモノ…ケモノ…モノ…ノ…
バケモノ…バケモノ…ケモノ…モノ…ノ…
バケモノ…バケモノ…ケモノ…モノ…ノ…
バケモノ…バケモノ…ケモノ…モノ…ノ…
バケモノ…バケモノ…ケモノ…モノ…ノ…
バケモノ…バケモノ…ケモノ…モノ…ノ…

化け物？化け物ってなんなんだよ。

１１．化け物の森へ行こう（前書き）

これからやたら長い回想編が始まります★

11．化け物の森へ行こう

「ナルシス様」
耳につく高い声が呼んだ。
「何だ」俺は振り向きもせず答える。

何人目だろうか。
女にも満たない幼さを残す、しかしもう少女とも言えない女性（メス）がキラキラした目を向けてくる。
次にくる台詞は聞かずとも分かった。
「私、貴方が好きなのです。あの…もし宜しければ…」
「断る」
間髪入れずに俺は女を冷ややかな目で見た。――誰だ、貴様は。
先程まであんなに憧れの眼差しを向けていたというのに、すでにもうそれは非難のものになっていた。そうだろう。そうなのだろう。
しかし、考えてもみろ。
何処の誰とも分からない馬の骨に、いきなり好きと言われて、挙げ句、頼み事までされようとなる。どうしろというのだ。
そばにいてくれ？
一緒になりたい？

厚かましいにも程があるというものだ。

非難の目に対して、俺は冷ややかな無表情を送り続ける。次第に女は目にいっぱいの水を溜めて、俺から逃げるようにして走っていった。
誰もいなくなった庭園。耳を澄ませば、鳥のさえずりや木々の擦

れる音、流れる水の音さえ聞こえる。
ひとりだ。そう、得体の知れない奴にこの美しき我が庭園を荒らされるのは気が気でない。余計な気を使わなくてはならない。なぜ見ず知らずの奴にそこまでしてやる必要があるのか。俺は、そんな礼儀知らずと一緒にいるよりかはずっと、一人でいたいと思っている。

が、しかし、世間では俺が“悪者”になるらしい。
好いてくるお嬢様たちを蔑み突き放す冷血漢、だと。
蔑んだ覚えはないが、突き放してなにが悪い。
どうせ地位と顔だけが目的であろう。明白なことだ。

「ふぅー…」
伸びすぎた前髪を書き上げて、空を仰いだ。

そして、人々は言う。
どんな女の誘惑にも負けない俺を、美しいらしい俺の顔を、貴族らしからぬ奇異な俺を。

――化け物だ、と。

これ以上この庭に居られない気分になり、お客様が見えていると云う執事をあしらって、俺は森へ行くことへした。

「駄目です。あそこは危険なのです、大昔から何人の人間が行方知れずになったとお思いですか」
乳母が言ったが、どうにもそれは俺を行くのを止める気にはさせなかった。むしろ、興味がそそられた。

樹海には、昔から言い伝えがあるのだ。

あそこには、化け物が住んでいると。人外の何かが住んでいるのだ。

ならば、もうむしろ俺は行くべきなのだろう。そう思った。

俺は化け物らしいからな。

この世に、本当に自分を好いてくれるものなどあるだろうか。

地位も顔も金も気にせず。そんな奴がいたならば、そいつは…

11．化け物の森へ行こう（後書き）

エコーの思い人、ナルシスの回想です。まだ続きます。

１２．出逢い

外から見ていたときと違って、森は明るかった。木々が鬱蒼として
いて暗くてジメジメしたイメージが有ったが…。
入ってしまえば、木々の間から降ってくる緑々とした光はむしろ、
澄み渡っており、心まで白く、明るくなるようだ。

もう随分と歩いている。庭園の芝生とは違う剥き出しの土は、靴
を汚していったが、別にそんなことは構わない。湿った土がひんや
りとした空気を作っていて気持ちがいいくらいだ。

しかし、困った。

闇雲に歩いてきたおかげで…。

「見事に迷ったな」

ひとり呟いて、木の木目と目を合わせた。
気のせいであって欲しいことだが、さっきもこの顔を見たような
気がする。よく小説やなんやらで道に迷い同じところを彷徨うのを
見て阿保らしいと笑ったものだが、どうやら俺の方が阿保だったら
しい。事実のようである。

乳母はじめ、村で専らの伝説となっているだけはある。
それよりも、恐らく、こんな深い森に入ってゆこうという者、そ
れこそ村から一刻も出たい理由がある者か、よっぽどの阿保くらい
というものだ。それが帰ってくるはずがない。

伝説が生まれた理由が分かった気がする。

そして、やっとだ。

何周つづけたか分からない同じ景色の連続に飽き飽きしてきたころ、やっと違う景色に巡り会えた。

――水辺に佇む小さな小屋。

俺は意気揚々と鬱蒼とした木々が少し減った水辺に足を踏み入れた。

「出ていけ！！！人の子！！」

突然のことで俺は不覚にも戸惑った。…今、声が聞こえたような気がしたが…。首を回してみるが、人の姿は確認できない。

もしかして、もしかするとの事態かもしれない。

いやいや、森をさまよいすぎて少し錯乱しているのだな。

気のせいだ、気のせい。

俺は自分に言い聞かせた。

取りあえず落ち着け。

その場に腰を下ろして湖を見つめた。ここはひとまず、これからのことを考えるとしようではないか。

「でていけと言うとろうが」

また聞こえた。

それに今度はもう空耳と自分に言い聞かせる術はなかった。

湖の中から箒を片手に美しい女の子が現れたのだ。

それが俺とエコー、水鏡の妖精との出逢いだった。

13．理解、違い

それからと言うもの、俺は自分でも驚くくらいエコーのもとへ通い詰めていた。同じだと思っていた景色も、よく見ればどこも同じところなんてなく木にも個々に表情があり個性があることがすぐに分かった。

家中、いや村中の者が、俺が森にとりつかれた、だとか騒いでいるが、俺自身そうなのではないかと時たま疑ってしまうくらい、世界が変わってしまった。いや、俺が変わったというべきか。未だかつて、俺が他者にこんなにも興味を示したことがあったろうか。

意外。心底、意外である。

何をするわけでもない。ただ水辺に佇み、エコーに邪険にされ、しゃべるでもなく、触れるでもなく。近くにいて、見ていた。太陽に煌めく湖を、月に揺らめく湖を、無垢にすべてを反射（うつ）す水面を。

それに、エコーを。

何をしたいわけでもなかった。ただそうしていたかった。この気持ちは何なのだ。

無性に、エコーの声が姿が欲しくなる。

経験したことがない、こんなこと。

――本当に、森にとりつかれたのではないだろうか。

最近、それすら信じ始めていた。そうでなければ、この自分でも不可解な行動をどう説明しようというのだ。

「アナタもよく飽きないわね」
などとエコーが笑う。ウェーブのかかった髪を宙に漂わせながら、水面から現れる。いつなんどき見ても、不思議で神秘的で、美しく、光ってすら見えた。それは、太陽の光が水面に乱反射しているからなのか、それとも――いずれにせよ、キラキラした空気を纏っていつもエコーは現れるのだ。

「自分でも、よく飽きもせずこのような辺鄙な所にあしげく通うものだと感心していたところだ。このように何もなくてはさぞかし困るだろうとな」

――実は、エコーを見にきている。
勿論、その思いは飲み込んで、俺は嘲た。
「よく言うわ」エコーも一緒になって笑った。
しかし…
「どうした？」
いつものエコーのような、全身を取り巻く明るい雰囲気が感じられなかった。キラキラが沈む。強張った笑顔。そんな風にすら感じられた。
元気がない？
俺が気づかぬうちに気に障るような不躾をしてしまったか？
しかも、声のトーンがいつもと違う。

俺に言われるとエコーは明らかに動揺したクセに、わざとらしく「なんでもない」なんぞ言って手を横にぶんぶん振り回している。
「嘘をいうな」
俺は、エコーの両手を捕まえた。

「なにかあるなら言ってみろ」
思わず力が入ってしまった。エコーは俯いて気まずそうにしている。

やはり俺が何かしたか？いや、それとも――コイツもまた俺を……化け物だというのか？

しばらくそのままの状態でエコーをみていたが、急に力が抜けてしまった。そうか…やはり…そう考えると、ふいに溜め息が漏れた。今になってようやく、この俺の不可解な行動の謎が解けた。溶け出した感情は――そう恋だ。これほどに滑稽なことはあるだろうか。あぁ。
化け物も恋をするということか。
今更だ。今更気付いたって――

やがてエコーは決意したように俺に向き直った。
どんな言葉で俺を拒絶するのだろうと身構えた。

「私、あなたのことが好きなの」
震えた小さな声が聞こえた。
――え…？
俺を…好き？
金も地位も関係のない、この妖精（じんがい）は俺を好いてくれるというのか？

「君は、鏡（エコー）と言ったね」

俺は高ぶる思いを押さえ切れなかった。
そうか！！そうだったのだ。
あぁ、俺も化け物で
「君も、化け物なんだろう」

嬉しかった。

それなのに。

エコー、君はどうしてそんなに悲しそうな顔をするんだ。

どうして俺の前から突然消えたんだ。

今日もあしげく俺は水辺に通う。

湖に映る自分を見つめる。

もういない、

なぜかいない、

水面の妖精（エコー）を探して。

14．今、現在

「バカみたいだ」レムが呟いた。
俺は草むらから、エコーを中心に歪んでいく世界を傍観していた。
目を閉じていても感じる破壊。
それほどまでにエコーの心は破壊されてしまっているのだろう。
だとしても、…“バカみたいだ”。
それに取り憑かれていては、何にもならない。

「バカッテナニ？」
エコーはほとんど歪みに歪んで世界と見分けのつかなくなった目でキッとレムを睨んだ。
「ワタシニトッテ、カレガスベテニナッテイタノ。
ナノニ、カレハ、ニンゲンハ、イツモ、ソウヤッテ――」
「ちがう！」
レムはついに歪みはじめた地面に足をとられた。しかし必死に叫ぶ。すごいな、少年。少し見直したぞ。
「僕、おばあちゃんからきいたんだ！！エコーを、君を失ったナルシスは水面の君を探し続けて死んだって！天上（うえ）の世界に逝った今もまだ探し続けて川に見入ってるんだって！」
エコーとナルシスの恋。俺も聞いたことのあるどこかの昔話だ。知らなかった。ナルシスはナルシストの語源で単なる自分大好き人間だと思っていた。俺がきいたことのある話は、ナルシスは自分が大好きすぎて妖精のエコーをふったその結果、エコーが悲しみのあまり声だけになってしまい、それにキレた神様がナルシスを水面に映った自分に惚れさせ、まだ天上（うえ）でも水面の自分に見惚れ続けている、というナルシスの悪漢ぶりを表すだけのものだった。
…それじゃあ、ナルシストっていうのはなんだ。

一途な恋をしてる奴のことを言うのか？
…はっ、なにを言ってるんだ、オレ。
場違いなことを考えていた。レムの言葉に歪みの勢いは幾分弱まったものの、まだまだ進行している。もう地面の歪みは俺の足元まで迫ってきていて、草むらも歪んでグニャグニャに見えてきた。こんな状況の中で俺は何、のんきに構えているんだ。
いや、しかし、そうは言っても近付けもしないこんな中じゃ俺には何もできそうにない。
それに、なぜか、レムがなんとかしてくれそうな予感がした。なぜなら――――…
「ソンナ訳ナイ！！ダッテ、カレハ、ワタシヲバケモノッテ…」
「それはたぶん彼も化け物だったからだよ」
レムが優しい目でエコーを見た。
「僕が化け物だったように」

「アナタが…化け物？」
歪みが止まった。世界がエコーを中心にまた逆回転して元の形に戻っていく。
「そう、僕も化け物」

レムは何を思ったか笑顔で俺のいる草むらに近づいてきた。
な、な、なにやってんだ。

みんながこっち見たら流石に俺がいるのがバレちまうだろ！！
焦った。友達の彼氏の浮気現場を目撃しちゃったみたいなくうきになるだろ！！盗み聞きしてたみたいになるだろ！！
…あ、いや、今の俺のはまさしく正真正銘の盗み聞きか…。

オタオタワタワタアタアタしているうちにレムが俺の前で立ち止まった。

「この人もそうだったらしいよ」

レムが草を捲る。

「ははは」

俺は決まりが悪くなって妙な笑い方をしつつ頭をかきながら立ち上がった。

すぐにテティスと目があった。睨み付けてくる。

娘(テティス)よ、母さん悲しくて泣いちゃうぞ。

いやいや。違った。忘れていた。

俺は母さんを晴れて卒業したのだ。ここは男として喜ぶべき展開中であった。

テティスは俺を…。

やばいやばい。

思い出すな。

神妙な場面でにやけることになるぞ。

皮肉にも赤面は顔の筋肉では止められない。

おかげで俺は化け物と言われて喜んで照れている変態さんみたいになってしまった。

「ははは」もう一度笑う。

コルトーの視(め)線が悲しい。やめてくれ。そんな目で俺を見るな。

お前の言いたいことなんて分かってるから。どうせまた、キモC…

「キモち悪いわ」

ほらやっぱり……って…え？
その言葉を発したのはもちろんコルトーでも、はたまたテティスでもなかった。…エコーさん。

いきなりですか。
いきなりここぞとばかりに罵倒ですか。
あなたさっきまで破壊によって歪みを起こしてたよな。いわゆる病み上がりの妖精だったよな。
それなのにいきなり俺を罵倒するとは…む、なかなかやるな。
どういうつもりなんだと睨もうとしたらエコーが俯いた。
「化け物なのか人間なのか訳わかんないわ！！はっきりしなさいよ！！」
怒鳴った。確かに気持ち悪いのかもしれない。しかしそれは、2つあると仮定した場合の話だ。
「ホントにバカみたいだな」
俺は笑った。
「区別するからややこしくなるんだ」

エコーは変な顔をした。

15．くさいヘイロン

「と、まぁヘイロンがクサい台詞を吐いてくれたわけですが」
コルトーが頭をかいた。クサい？臭いって！？さっきからみんな俺の扱いひどくね？
つかコルトーお前だれのせいで俺がこんな事を言ったと思ってんだ？
そもそもは全てお前の発言が導いたことなんだぞ。俺、影から盗み聞きしてたからちゃんと知ってるんだぞ。
お前がエコーの地雷踏んでただろうが。

「くさいとはなんだくさいとは。俺は悩める乙女を思ってだな…」
「ほら、そーゆーのが臭いんだよ。あぁ、くさいくさい。ヘイロンこっち寄らないでよー臭いのが移るー」
コルトーはそうにやついてからわざとらしく鼻をつまんだ。

台詞が臭いんじゃなかったのかよ。匂いまで臭いのかよ。そう思ってコルトーを一瞥してやるとなんとまさか「テティスがヘイロンが来たら匂いで分かるって言ってたもん」だとかぬかしやがった。
…マジ？
え、俺近付いたら臭うくらいくさかったのか？
うわー…ヘコむわー…これはマジで凹む。しかもテティスにくさいなんて思われていたなんて――…！！
……いや…でも……テティス、俺のこと好きって言ってたよな！
それはつまり、俺が臭くても好きってことだよな！！
いやもうむしろこの匂いが好きなのかもな！！

よし！！そうだ、そうだ！！
絶対そうだ！！

コルトーに普段から酷い扱いをされるせいか、俺の元々強かった精神はもはや仙人の領域に達している。おかげで立ち直りが早くて自分でも感動してしまう。なんたるポジティブシンキング。
なんてテティスのことを考えていたら、頬の筋肉が弛緩して思わずにやけそうになる。危ない。
最近、ずっと森で生活してきたせいか、周りの目を気にしなくなりすぎていて困る。コルトーがまだなにか言いたげな目をしていたが、俺は軽くあしらうことにした。
つか、俺が臭かったら、レムはもっとクサかったろうにな。
そういう扱いはあくまでも俺にしかしないんだな。

「で、話したいことはなんだ？コルトー」
無表情を装う。
「そうそう」
コルトーはコルトーで、あたかも今思い出したというように手をポンと叩いた。こういう照れ屋なところにはまだ少し可愛げがあるから、俺も許せてしまうというものだ。くやしい。
「エコー、君が回復したところで少し手伝って欲しいことがあるんだ」

「シェルリンはいなくなったか？」
「レムは逃げ出したのか？」
「いや、そんなはずはない」
「龍様へ生贄にだしたのだ」
「街の為だと、化け物でもそれくらいは分かるだろう」
「その証拠にほら、雨が降り始めた」
街中の血気盛んな男たちが息を寄せ合って何やら呟いている。
だが、声がデカいので情報がだだ漏れだ。意味がない。
それにこっちには風の妖精がいる。すべての噂はそこらの風が教えてくれるってもんだ。
石造りの道並に、くすんだ緑や朱の塗料が塗ってある家が立ち並んでいる。洗濯物はいたるところに干され、それだと言うのに市をやっているというのか、所狭しと商品が陳列してある。活気がある、というよりはゴチャゴチャした乱雑な感じがするだけのように思えるのは、俺のこの街への偏見だろうか。
木造の家が続いているにも関わらず、そこに突如石造りの“いかにも”という感じの建物が現れる。レム曰わく、アレが“生贄”をつくる建物だという。言葉を崩して分かりやすく言うと、要するにラッピングだ。龍様へのプレゼントに装飾（…？）をするんだからそれであってるだろう。いや…でもこの言い方はちょっと非道いか。でも、ラッピングか。
つくづく俺の村の奴らも可哀想だと思ってきたが、そんなセンスのあるお洒落な可哀想な奴らじゃなくてよかった。
そこで、お洒落（かわいそう）なおっさんどもはまだ何やら話し合っている。
俺達というと、俺得意の草むらに身を潜めていた。
ちなみに俺達の内容物は俺とレムだ。
残りの御三方はどこに行ったのか。

実を言うと俺も知らない。いや、俺は知らないという方が正しいだろう。コルトーの奴、なんでも俺はこの作戦に関係はないからとか言って俺を除け者にしやがった。正直言って、非常に悔しいが寂しい。それがコルトーの狙ってやっていることだと分かっているから余計に悲しい。

俺は、俺が得意な盗み聞きをしていればいいらしい。

クソ、コルトーに嫌なネタを掴まれたな…。

レムは、コルトーからひそひそとその作戦とやらを聞いて、不安そうな表情を一瞬浮かべるものの、好奇心というかワクワク感が滲み出ていて、さっきからというものの俺の隣で浮き足立っている。

余計気になる。

俺は人のことをあれこれ嗅ぎ回るのは好きな質じゃないが、さすがにこの状況ではあれやこれやと詮索したくなってしまう。でも、俺が悪いと言う奴はいないはずだ！あのすかしたドS妖精以外は！

…ったく。

何をしでかす気なのやら…。

ハラハラしてきたじゃないか！…どーせ関係ないですがね。

とかなんとか思っていると、いつの間にかレムが姿を消していた…ついに一人ぼっちかよ…。

一人きりで、草むらにイン！！

なんつーか…なに。俺見つかったらすっげぇ悲しい奴。

見つからないように石造りのところの人だかりに目を凝らすことにした。

…でも…本当、黒髪がいるんだな。

レムの話が半信半疑だったのが、いま改めて実感できた。
みんながみんな、俺のような、黒。
そのことを疑ってもいない。それが当たり前だというように普通にしている。
いわれもない罪悪感を何故かしら覚えてしまう。
この“黒”が、レムを異にした。
俺がやった訳でもないのに、感じるこの感情は――…俺が髪の色しか共通点のないアイツらに少しでも仲間意識を持ってしまっているということだろうか。
俺の中で何かがチクリとささる。
結局は、髪の色や耳の形、見た目なんかはどうでもよくて、俺もアイツらも同類なんじゃないか。
そんな考えが一瞬よぎる。
だが、だからなんだと言うのだ。
俺は紳士であるからそんなことはすぐに気付いたさ。
大きな違いがあった。
アイツらを俺がいくら差別視したところでアイツらには微々たる傷もつかないだろう。
しかし、アイツらは違う。
アイツらは何かを傷つけている。
うんうん。何だか綺麗事のような気がするし、自虐的なような気がするでもないが多分そうだ。いやてかそう思いたい。
じゃないと、悲しくなる。結局は俺が、だけどな。人間、所詮自己中な生き物なんだよ！！仕方ないさ、俺はこう見えて人間だからな。
人だかりには人がうようよしていていたたまれなくなってくる。
何も世界は広いのにそんな一カ所に固まらなくたっていいだろうに。
…って、え？
なんでそんな固まってるんだ？

よく見てみれば押し合いへし合い、みなさん、何かを見ようとしている。
なんだなんだ？
俺が目を凝らした瞬間だった。

突如、風が吹き荒れ、高笑いが不気味に木霊し、鱗が重なるようにして――レムが現れた！

15．くさいヘイロン（後書き）

ちなみにヘイロンの体臭はくさくありません。

１６．形勢逆転

な。な。なんでレムがファンタスティックに登場しちゃってんだよ。

おい、レムお前普通の人間じゃなかったか？

初の常識人じゃなかったか？

なのになんでそんな不気味に登場しているんだよ…。

あたりにたちの悪い笑い声が木霊しているし、風はすごいし、雲もないのに雨が吹き荒れている。

そこに小さな肉片が鱗状になりながら集まっていって身体が中心に向かって造られていく。端から出来ていくものだから、中身見えちまうし、中心はブラックホールなわけで…まるで……いつもコルトーと同じじゃないか……！？

…って、えっ！？

ちょっと待て、俺。落ち着け、俺。

コルトーはエコーに何と言っていた。

協力して、と言っていただろう。それに、エコーは水鏡の妖精だと聞いた。そして龍であるテティスが駆り出された…つまり、これは…。

「お前らには感謝…しているぞ…」
嘲けたレムの声が反響する。絶妙なタイミングで冷たい風が吹き付ける。
「おかげで…無駄死にだ」
低く呟れた。卑屈にレムの口が歪む。あははと甲高い声がまた木霊する。

突如、風が止んだ。
笑い声はどんどん高くなり、ついに止まった。

「龍は言っていたぞ！！」
いきなりレムがクレシェンドに叫んだ。

「このような、悪趣味な贈り物、我は必要としていない。我が見返りを求めてお前らを救ってやっていると思っているのか。救いようもないやつだな」

冷たい雨。震え上がる人々。

俺ですら背筋がゾックゾクしている。
何も知らない街の奴らの恐ろしさは何たるものか。いまにも気絶してしまいそうなやつもいる。

「また一度とこんなことをしてみろ。お前らが無駄死にすることになるぞ」

ドーンと地響きがした。どこかで雷が落ちたようだ。

「バカナヤツラダ」

カクカクとレムが歩きだした。

人々は次々に逃げ出していく。みんながみんな「ごめんなさい、もうしません」と口を揃えて。

つまりは、だ。

笑い声が木霊していたのはエコーの仕業、風は勿論コルトー、雲もないのに雨が吹き荒れていたのは龍、つまりテティスの業。

小さな肉片が鱗状になりながら集まっていって身体が中心に向かって造られていくというグロテスクな登場シーンは、コルトーに似ているのではなく、アレがコルトーだったから。

恐らく、コルトーが水かなんかを被ることで水越しにコルトーの表面に、エコーがレムを移していたのだろう。

騙された気分だ…。

俺の心拍数返せ…。

しかし、最後なんて雷落ちてたよ？テティス、いつの間にそんな力を持ったんだ…？強くなったな。母は嬉しいぞ。いや、でも寂しいような…。

子供の成長を実感するときというのは、勿論微笑ましく嬉しいものだが、同時に、子供がもう自分の助けを必要としなくなるのだ、と巣立ちしていくときのような寂しさが混じって、なんとも言えない複雑な気持ちになってしまう。

いや…けれど…今は……。

何だかまた違う思いがあった。

…テティスにあんなこと、言われたからだろうか。
テティスは俺のことを“母親”だと思っていなかったのだ。
いや、そんなシリアスチックなことじゃないんだぜ。俺が好きだって言うんだ。乙女チックでピンクでほんわかな…俺とは縁遠かった世界なだけだ。その感覚が分からない、というのは相まっているのかいないのか…いや…分からないわけじゃないんだよ。
でも、母親として娘と思って育ててきたというのに、いざ娘に“男”宣告されても悲しくはならなかった。
嬉しかったのだ。
そう、嬉しかった。
何故か？考えれば考えるほど分からなくなる、永遠のループに陥るが、何となく予感のようなものがあったのかもしれない。
あ、自意識過剰とかでなくテティスが俺に、とかでなくな。
結局、どんな関係であってもどんな感情であっても、俺はテティスがこの上なく愛おしいのだと。一緒に居られればそれだけで俺は幸せなのだと。
一緒にいたいだけなのだ。
――…と。

だからいずれ巣立っていく母から、生涯寄り添える人になったのが嬉しかった。たぶん。
俺はこっぱずかしいくらいテティスが好きなのだ。
テティスには、ヘイロンの馬鹿と言われてしまったが、これくらいのことは伝えとかないとな。
まぁ…。
まだ俺は、テティスを恋愛対象にできるほど状況に順応していな

いが…。

そんな風に色々考えていたからだ。何も気にせずに、草むらから立ち上がってしまった。

「アイヤー！！美男子が草むらから出てきたよー！！」
「さっきのに続く妖怪じゃなかね？」
「違う絶対違うね！！こんなに美しいんだもの！！」
「アイヤー！！本当に！！」

通りがかったおねいさん二人に捕まってしまった。
さっきまであんなに怯えた表情してたよな。…女っつーのは切り替わり早くて恐ろしい…。
一介の人間を化け物だなんだと生贄に出すような街だ。下手なこと言って、不審がられては一貫の終わりだ。ということで、俺はなすすべもなく、おねいさん（…？）に腕をぎっちり組まれ街の中心部へと連れ去られた。

あああぁ…。

どうしたもんか……。

17. 龍

恋滝のぼるとき龍になれ。

ずっとずっと昔、主はそう言って、僕に龍の子を託した。

人間界から、生贄をとってそれを育てさせよ、と。龍の子は恋を知ってこそ、一人前の龍になれるらしい。

世界中の水神――龍を統べる頂点である主は、白の泉でいつぞや、どこからか生まれてくる龍の子を、世界の水を整備するためには育てなくてはならない。天界から広がる世界に対応して水を操る。それが龍の仕事なのだ。

なんでも龍の子は、人々の心が強く願ったときに生まれるらしい。そんなわけで、主と龍の子の間には、血縁関係はないのだから長き時を生きる主が龍の子をその巧みな話術で恋に落とすことも出来るはずだった。…しかしまた意外なことに、主は愛妻家で、妻ができてからというもの若い子を口説けるか、なんて言い出した。

だから、龍の子を望んだらしい人間とやらに責任を持って育てさせようという形に落ち着いたのだ。

責任感あるというかないというか…。

そして古くから友人だった僕に、雑務に忙しい主の代わりが任されたという具合だ。

そして僕は若輩だった。

龍の子ともすれば一応は神、人間に任せると言っても、ただの人間ではなくて、みんなに慕われ想われ頭の切れるしっかりした奴を選ぼうといって、はじめにアイツを選んでしまったのが間違いだった。――黒龍(ヘイロン)。

一代目(ヘイロン)黒龍は、主が育てていたときよりずっと早く、竜の子を育て上げ、主の面子を丸つぶれさせた挙げ句、無事恋を知って龍になった龍の子は天界に行って主に仕えて働くより、人界に留まって黒龍(ヘイロン)と一緒に直接水を導きたいと言い出したのだ。独裁者ではないし、平和な神の世界の秩序を乱すわけにはいかない主は、内心、はらわた煮えくり返っていただろうに、認めざるを得なかった。かくして、神は人に負け、面を横殴りされた上、直接人界の意見を取り入れて統べる方法は今までより良いと好評になり、立場が非常に……残念なことに…なってしまった。

以来、僕は“責任”をとって人界に留まり、主のせめてもの計らいで黒龍(ヘイロン)一族が生贄に代々選ばれている。

主は、子供が奪われる屈辱を味あわせてやるのだという。

とても神様が考えることとは思えない。しかし主は子煩悩なのだ。そりゃ僕だって引いちゃうくらい。ロリコンなんじゃないかと心の片隅で疑ってしまうくらい。いや、心の片隅で、だよ。

しかし、それ以来黒龍(ヘイロン)一族の連戦連勝。負け知らずだ。無自覚に無意識にたらしな一族。だと僕は思った。実際、妖艶で色気あって頭もいい。しかも、龍とのハーフ、ハーフ、ハーフの積み重ね。そろそろ人間を抜け出していいレベルなのではないだろうか。美しさにおいてはもう主をも抜き始めている…ような…。

今回のヘイロンもまたそうだ。

しかも、今までとは何かが違う。

そんな気すら彷彿させる。

僕のはじめの失敗のおかげで、黒龍家の赤ちゃんは人間の村に預けて人間と育つという結果になっている。

それは僕だって反省していた。だから、黒龍の子が困っていたら助けてきたし、気にかけていた。村にはなぜか黒髪はいないし、これは虐めだ、何度となく思った。

でもヘイロンは村にいるときから、違った。

村人とも、過去の黒龍とも。

それははじめの出逢いからだったろうか。

予感は、もうすでに現実になってきている。

龍の成長は早い。

龍の力だと彼は勘違いしているようだけど……。

龍は、恋を知ってしまった。

その龍はというと、作戦が成功したことに大喜びして、興奮醒めやらぬ状態で、少年（レム）と跳ね回っている。

…まだまだ子供だな…と安心しつつも、そろそろなのだと身構えてしまう。

テティスが落ち着くのは当分先だろう、と風たちと戯れはじめたときだった。

テティスが必死の形相で駆け寄ってきた。

「ヘイロンがっ…人間に連れ去られちゃった！！」

「もうーヘイロンったら」

「こっち見てよー」

薄暗い酒場。場違いな俺。

何故だか、俺は綺麗なお姉さんに取り囲まれていた。さっきから酒を勧めてきては、私と私と、と迫ってくる。…怖い。

大体、私と、なんだ？

そして俺はさっきから何もしていない…むしろ遠慮と謙遜を繰り返し、非常にへりくだった態度で縮こまって囲まれているというのに、店の片隅でちょびちょび酒を呑んでいる男どもは俺に突き刺さんばかりの視線を向けてくる。

やめてくれ。俺は悪くない。

捕まっただけだぞ。そしてお姉さんに囲まれてさっきから可愛

がりを受けているだけだぞ。

…あ、抵抗しているのがおこがましい？

俺ごときが女性（レディ）の誘いを断っているのが無礼ということでしょうか？

ったく、男性に助けを求めようと思ったのにこれじゃ……抜け出せん…。

しかも女性（レディ）たちはそうとう酒が回ってきたらしい。

赤く火照った顔が迫ってくる。

…でも……ここで抵抗なんてしたら――――…

「うわっ！！…ちょ。どこ触って……やめてくださいって」

振りほどこうとお姉さんの腕を握った瞬間だ。もの凄い勢いで、店のドアが開いた。

店外で、店主が「ちょっとお嬢ちゃん、まだ年が足りないよ」とか言ってるのがわずかに聞こえてきたと思ったら――――

「ヘイロンの馬鹿！！鼻の下のばして何やってるの！！」

お姉さんたちとはまた違う真っ赤な顔した少女が現れた！

…助かった！！

「テティス大好きだ！！」

俺はテティスがやってきたのと同じ勢いで、テティスに抱きついた。

殴られた。

「ヘイロン最低だね」
やけに嬉しそうな顔で、風の妖精が言った。おい、台詞と表情が一致してないぞ。出直してこい。
「告白されたその日に、浮気？しかもそこからのセクハラ？」
しかも開口一番、俺をからかう。
俺は拉致監禁されてパワハラを受けていたんだぜ？もう少しいたわるとか、慰めるとかなんかすることがあるだろ。
心の叫びをなんとか飲み込んで、俺は引きつった笑顔を浮かべた。
「人聞きの悪いことを言うな。俺は精一杯の抵抗はしていたんだぞ」
「え、なにから？…あ、自らの欲望から？」
吹いた。口から空気が漏れて、自分の唾液に溺れてむせる。ごほんごほんやっているうちにコルトーは「やっぱりなぁ。最低だなヘイロン」だとか力説している。
…コイツは何が何でも俺を変態に仕立て上げたいらしい。

…もういい、もういい。

「分かったよ、もうそれでいいよ」

そう言いながら、俺はおもむろにテティスに抱きついた。

そろそろ娘としては思春期だしあんまり親がくっついてはうざかろうなと、最近あまりテティスに絡んでいなかった。

この際、テティスが俺を好きというのにあやかって好き放題させてもらおうじゃないか。

「へっへイロン、いきなり何するの」

予想通り、テティスは必死に抵抗する。しかし、今回に限り俺は手加減はしない。

テティスに伝えなければならないことがある。

「俺のことお前好きって言ったよな。俺はまだお前をそんな風には見れないし、気持ちの整理もできてい。でも、どんな関係であってもどんな感情であっても、テティスがこの上なく愛おしい。一緒に居られれば幸せだって。それだけは覚えといてくれ」

…。

……。

……。

自分で言って恥ずかしくなった。…悔しいが、コルトーの言う通りなのかもしれない。

――俺って…くさい！！

なんで思った通りに言ってしまうかな、俺！！

「いや、やっぱ忘れてくれ！！」

悲痛な俺の叫び声が森に響いた。

「どっちなのー！？」

楽しそうな少女の声が森に響いた。

――そんな日常。

18．花の妖精

綺麗な空。
黄緑の木洩れ日。
優しい幹。
溢れる太陽。
こんなに美しい森。
こんなに美しい私。

え、ナルシストみたいって？

ふふ。止めて頂戴。冗談でも怒るわよ。私をあんな意気地なしの人間と同じにしないでくれるかしら。

私は、何者よりも花を振りまいているの、あ、比喩じゃないわよ。事実よ。現象よ、現象。

――――だって、私は、花の妖精。

「ヘイロンさーん、これは食べられますかー？」

嬉しそうな声でレムが駆け寄ってきた。その手には大きくて真っ赤な…

「そりゃ毒キノコだろうな」

俺がそう言うとレムは一気に肩を落としてまた食料調達の旅に出かけていった。――――なんだ、このデジャヴ感。今までの流れから言うと、こういう流れでは確実に何かが現れる。しかも、俺の予感が正しければまた何か面倒で大変な何かが。例えば、風の妖精（コルトー）とか。

そんなことを思っていると、心地よい秋の風が吹いて、あまり綺麗とは言えない登場の仕方で綺麗な妖精が現れた。

コイツはこう、どうしていっつも丁度いいタイミングで現れるんだ。

「ふたりはまた食料調達に行ってるよ」

俺は、小さく溜め息をついて、キノコや薬草やなんやでいっぱいいっぱいになったカゴをコルトーに見せた。

「もう十分だろうに」

俺が折角、気を使って話題を提供してやったというのに、対するコルトーはというと、ふーんと気のない返事だけをして、黙ったまま俺を見ている。な、なんだよ。気色悪いな。

居心地が悪くて、俺は目を反らす。すると、コルトーは俺を一瞥

して言った。
「ヘイロンいま、失礼なこと考えてなかった？」
「なっ…なんでだよ。なにをだよ」
やっぱコイツ恐ろしいわ。絶対、人の心を読むとかいう副能力を兼ね備えているに違いない。
「やっぱり考えてたんでしょ。全く今日は良い情報を持ってきてあげたというのに…」

そこまでコルトーが言って、二人で顔を見合わせた。

遠くから、テティスとレムの叫ぶ声が聞こえたのだ！！

「あ、レムー！！食べれるってー？」

テティスは僕を見つけると手を振った。僕は応える代わりに、キノコを持った手を振り返した。

僕がしたように、テティスは肩を落として、
「そうか…これなら大きくてお腹いっぱいになると思ったのになぁ」
と呟いた。

…いや、正直僕も食べられないと思ったけどね。
それに、僕だってテティスにそう言った。

僕の言葉をテティスは信じないで、それなのに、ヘイロンさんのことなら一発で信じちゃうわけだ…。
…それは、僕が子供だからだろうか。
それともヘイロンさんの絶対的な信頼度の違い？
いや、どっちもかな…。

そんなことを思って、なぜか途方もない虚しさを感じた。胃が浮つくような気分だ。

何故だろう。折角、森での生活にも慣れてきて、毎日が楽しくなりだしてきたところだと言うのに、ふとした拍子にそんな虚しさを覚えてしまう。

しかし、そんな感傷に浸っていられるのも束の間の一瞬だけだった。

テティスが、「こっちから良い匂いがする～」と気の向くままに何も考えずに走り出した。

ヘイロンさんが言っていた。

これでもテティスはおとなしくなったんだ。疲れるだろうが、頑張って付き合ってやってくれ。
と。

これより凄かった、ってことですよね。いややっぱり尊敬します…ヘイロンさん。

「ちょっと待ってよー！！」

僕は道に迷わないよう、記憶しながらテティスを追い掛けはじめる他なかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9117t/

白黒の龍の日記

2011年11月30日14時48分発行